

研究ノート

一人称への意味づけ尺度の作成

Development of the scale of implication in first person pronouns

大和田智文

要約：本研究では、既存の一人称への意味づけを尋ねる項目群を独立した尺度として再構成し、その信頼性と妥当性を検討した。専門学校生 89 名を対象に質問紙調査を行った結果、一人称への意味づけ尺度は、一次元性と高い信頼性を有していることが示された。また、既存の集団同一視を測定する尺度との間にも理論的に期待される程度に強い正の相関が見出された。以上より、本尺度の信頼性および妥当性が検証された。

Key Words：一人称への意味づけ、集団同一視、社会的アイデンティティ

これまで社会的アイデンティティおよび自己の表出に関する諸研究においては、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような集団に対する同一視の程度と「自己（自分らしさ）の表出」との関連性が数多く議論されてきている（e.g., Hogg, 2006; Kashima, foddy, & Platow, 2002; 大和田, 2010; Turner, 1987）。たとえば、大和田（2010）や大和田・下斗米（2008）では、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような集団において、その集団に対する同一視の程度が高い個人ほど、自己の表出の指標としての「一人称への意味づけ」（特に一人称に対する愛着）をより強く抱いていることが示されている。ここでは、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような集団を、あたかも自分自身と一体であるかのように「自分自身の集団」として捉える傾向が、自分らしさをより肯定的・是認的なものとして表出するように方向づけているのではないかと考えられていた。

このように、こうした諸研究は、人が自己に対する肯定的な感情を得るためにはまず社会的定位のための集団が必要になるという、人間の個人的側面に対する社会的側面の優越を主張するための理論的基盤を築いてきていると言ってよいだろう。

しかしながら、上記の大和田（2010）や大和田・下斗米（2008）では、人間の社会性や自己という大きな概念

を双方向的・包括的に理解していこうとする際に必要となる手がかりが不足しているというのも事実であった。それは、すなわち、大和田（2010）や大和田・下斗米（2008）で用いられた一人称への意味づけを尋ねる項目群は、あくまで項目ベースでの分析を前提としたものであったため、「自己」という構成概念を測定するための指標として一人称を採用した上で、この構成概念自体を測定しようとい図されていたわけではなかった、という点に端的に示されよう。

自己とは一般的には、自分自身と、自分自身を取り巻く他者や集団・社会といった、自分自身との関係性を有するものすべてを含む包括的な構成概念だと考えられている。すなわち自己とは、社会的存在としての自分自身そのものを指す概念であるため、「自己」には、接する他者との関係によって、あるいは所属する集団や社会が異なることによって、自分自身のあり方も変わり得るといふ含意を認めることができる。

この点を踏まえると、本研究における「自己の表出」は、あらゆる状況を越えた安定性を持つものではないにせよ、少なくとも、個人が直面するある状況との関係において安定的に測定できるものであることが望ましい。このように「自己の表出」を測定すれば、個人と個人を取り巻く環境との相互作用の中で自己の表出を捉え得ることになるため、上記の自己の一般的定義とも整合する。自己の表出のこうした捉え方は、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような「自分自身の集団」と、自己すなわち自分らしさをより肯定的・是認的なものと

して表出することとの関連性を、一方向的な影響過程としてではなく双方向的なよりダイナミックな現象として捉え直すことにもつながる。この捉え直しを可能にするためには、安定的に自己の表出を測定することのできる尺度が必要となってくる。すなわち、既述の一人称への意味づけ項目群を、個人が直面するある状況との関係において自己の表出の測定が可能な尺度として再構成ができれば、この新たな尺度が前に指摘した問題を解決に導くための有力な足がかりとなろう。

そこで本研究では、大和田(2010)、大和田・下斗米(2008)で用いた一人称への意味づけ項目群を独立した尺度として再構成し(すなわち、「一人称への意味づけ尺度の作成」を意味する)、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。それらの検討を通し、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような「自分自身の集団」と、自己をより肯定的・是認的なものとして表出することとの関連性を、双方向的でダイナミックな現象として捉え直すための基礎資料を提供することとする。

また以下の「方法」部分については、大和田(2010)、大和田・下斗米(2008)と同様であるが、これは本研究での結果の分析においても必要な情報であるので、なるべく省略せずに記載する。なお、質問項目の収集・選定基準や集団同一視尺度の採用理由など詳細については、大和田(2010)、大和田・下斗米(2008)を参照されたい。

方 法

調査対象

東京都内の専門学校生(介護福祉専攻2年次生)計91名を調査対象とし質問紙調査を実施した。授業時間を利用し質問紙を一齐に配付した。なお、以下の「質問紙構成」においては、本研究の主要な目的である尺度作成に直接かかわる部分のみを記載した。

質問紙構成

一人称の使用(選択)(質問1-1) 日頃主に用いる一人称について、使用頻度順に3つまで記載を求めた。

一人称への意味づけ(質問1-2) 質問1-1で挙がった最頻の一人称の大切さや愛着の程度(以下に記載の第1および第2項目に相当)、当該一人称への自己意識の現われ(第4および第5項目に相当)、他者との関係における当該一人称の捉え方(第3および第6項目に相当)につき、独自に作成した項目(以下、これを「一人称への意味づけ尺度」とよぶ)を用いて質問した(ここでは、これらの質問項目をもって一人称への意味づけを問うも

のであると想定した)。具体的な項目内容は、「その一人称を用いることは、あなたにとってどの程度重要であると思われますか?」、「あなたはその一人称に愛着を感じていますか?」、「あなたがその一人称を用いるとき、相手によっては他の一人称に替えた方がよいと感じることはありますか?(逆転項目)」、「あなたがその一人称を用いるとき、『まさしく自分らしいなあ』と実感しますか?」、「あなたはその一人称を、他の一人称をもって替えがたいものであると感じていますか?」、「あなたがその一人称を用いる時、ためらいを感じるようなことはありますか?(逆転項目)」の6項目からなり、それぞれにつき、「1(全くそう(重要)でない)」から「7(とてもそう(重要)である)」の7段階で評定させた。

社会的アイデンティティ確立の基盤となり得る集団(質問2-1) 学生生活を送る中で必要不可欠と想定されるような集団を9個提示し、最頻と回答のあった一人称をこのうちのどの集団において主に用いているかを尋ねた。具体的な項目内容は、「所属専門学校のメンバー」、「所属ボランティア団体のメンバー」、「所属サークル・所属県人会のメンバー」、「同じクラスや同じ授業のメンバー」、「遊びや食事などをともにする仲間」、「高校・中学時代からの仲間、地元の仲間」、「バイト先・実習先のメンバー」、「趣味の仲間」および「家族」であった。項目の収集については、大和田(2006, 2007, 2010)において社会的アイデンティティの探索的検討を目的に自己紹介文の記述を求めた際に得た資料や、今回新たに行った予備調査(2005年12月実施)¹⁾より得た資料をもとに行った。なお、この予備調査は大学学部生(心理学専攻)11名を対象に行ったものであるため、本調査実施に際し調査対象である専門学校生に合わせて提示項目の再検討がなされた。

集団同一視(質問2-2) 質問2-1で回答のあった集団に対する同一視の程度について尋ねた。その際、Karasawa(1991)によって作成された、個人のある特定の集団に対する同一視の程度を測定する集団同一視尺度を用いた。この尺度は、ある集団の成員であることへの誇りや愛着、仲間の重視(大石, 2003, p.109 参照)を測定するものであるため、一人称への意味づけとの間に理論的には中程度の正の相関を期待できよう。具体的な項目内容は、「『あなたはその集団における典型的な人ですね』といわれたとしたら、私はその表現が自分に当てはまっていると考える。」、「『自分はこの集団の一員だなあ』と実感している。」、「『あなたはその集団における典型的な人ですね』といわれると、よい気持ちがある。」

「私は自己紹介をするとき、その集団のメンバーであることを明らかにする.」、 「私はその集団にとっても愛着を感じている.」、 「私の考えや行動に影響を与えた人が、その集団の中には数多くいると思う.」、 「私の最も大切な友人たちは、その集団に数多くいると思う.」の7項目からなり、それぞれにつき、「1(全くあてはまらない)」から「7(とてもあてはまる)」の7段階で評定させた(項目の邦訳は大石(2003)も参照)。

人口統計学的変数 年齢、性別、所属、現在の居住地および出身地について尋ねた。

調査時期

2006年1月下旬であった。

有効回答

調査対象者91名全員より回答を得たが、このうち回答に研究上の重大な欠損のあった2名を分析より除外したため、有効回答者は89名(男性36名、女性53名)となった。有効回答率は97.8%であった。有効回答者の平均年齢は21.34歳(19歳から43歳まで、 $SD = 3.67$)であった。ただし、有効回答者のうちの2名については年齢が不詳であった。

結 果

一人称への意味づけ得点の因子分析および信頼性の検討

一人称への意味づけ尺度について、回答に大きな偏りが生じた項目がないことを確認の上、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。初期固有値を1.0以上としたところ、2つの因子が抽出された。共通性が.300に満たなかった項目が1項目あったため、これを削除の上再び因子分析を行った。ここでも共通性が.300に満たなかった項目が1項目あったため、これを削除の上再び因子分析を行い、最終的に1因子解(4項目)が最適であると判断した。すべての項目において.550以上の因子負荷量が示された(Table 1)。

クロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .827$ となったため、本尺度の信頼性は十分に高いことが検証された。

Table 1 一人称への意味づけ得点の因子分析結果 ($n = 89$)

	因子負荷	M	SD
あなたがその一人称を用いるとき、「まさしく自分らしいなあ」と実感しますか?	.843	3.506	1.560
あなたはその一人称に愛着を感じていますか?	.776	3.596	1.650
その一人称を用いることは、あなたにとってどの程度重要であると思われますか?	.764	3.719	1.438
あなたはその一人称を、他の一人称をもって替えた方がいいものであると感じていますか?	.578	3.292	1.432
α	.827		

構成概念妥当性の検討

一人称への意味づけ尺度と集団同一視尺度(尺度全体での得点を使用)の相関を検討した。その結果、両尺度間に有意な正の相関がみられた($r = .306, p < .01$)。この数値は、一人称への意味づけがある集団の成員であることへの誇りや愛着、仲間の重視の程度と関連していることを示す上に十分な値であると考えられるため、一人称への意味づけ尺度の構成概念妥当性の一部が検証されたといえよう。²⁾

考 察

本研究は、一人称への意味づけ尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することが目的であった。また、それらの検討を通し、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような「自分自身の集団」と、自己をより肯定的・是認的なものとして表出することとの関連性を、双方向的でダイナミックな現象として捉え直すための基礎資料を提供することも目的のひとつであった。

一人称への意味づけ尺度については、既述の通り、単一の因子4項目より成るものであることが確認された。このことは、一人称への意味づけ尺度が、自己を細分化して捉えるのではなく包括的に捉えることのできる次元性の強い尺度であることを示していると考えられる。本尺度の作成目的が、最終的には人間の社会性や自己という大きな概念を双方向的・包括的に理解していくためのものであるという点を考慮すれば、本尺度はこの研究目的とも一致する内容的に妥当なものであったといえよう。

また、一人称への意味づけ尺度との関連が予測された、集団同一視尺度との間に、中程度の有意な正の相関がみられたことから、一人称への意味づけ尺度の構成概念妥当性も部分的に検証されたものと考えられる。

このように、一人称への意味づけ尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討という本研究における一連の検討によって、社会的アイデンティティ確立の基盤となり得るような「自分自身の集団」と、自己をより肯定的・是認的なものとして表出することとの関連性を、双方向的でダイナミックな現象として捉え直していくための足がかりを築くことができたように思われる。

今後は、一人称への意味づけ尺度の構成概念妥当性の収束的・弁別的側面についてのさらなる検討を行い、本尺度の安定性を重ねて検証していくことが求められる。その際、次元性の強い本尺度とあわせて、たとえば多

次元自我同一性尺度を実施し、多次元自我同一性尺度の下位尺度ごとにどのような相関がみられるかを探索的に検討することなども、本尺度の持つ関連尺度に対する収束的・弁別的性質を見極めていく上で有用な方法となるのではないだろうか。そうすることにより、本尺度によって測定される自己の側面を、他の尺度によって測定される自己の側面との対比から相対的に把握することが可能となろう。

また、本研究の本調査および予備調査では、調査対象者が専門学校生および大学学部生のみであったが、本尺度の一般化可能性を高めていくためには異なった多くの世代を対象とした調査を重ねて実施していくことが求められる。

さらに、本研究では性差の検討は行っていなかった。それは、自己の表出を一人称への意味づけという「強度」によって測定する際、その強度に性差が生じることを予め仮定していなかったことによる。しかしながら、日本語の一人称にはその「使用」において著しい性差が存在することも周知の事実である。であれば、その意味づけの強度に対しても性差が影響していないかを改めて検討していく必要もあるだろう。もしもそのようなところに男女による「自己観」の質的相違などを見出せるならば、そこから社会的アイデンティティや自己の表出に関する研究にさらなる発展をもたらす議論が展開されるかもしれないからである。

引用文献

- Hogg, M. A. (2006). Self-conceptual uncertainty and the lure of belonging. In R. Brown & D. Capozza (Eds.), *Social identities*. Hove and New York: Psychology Press. pp.33-49.
- Kashima, Y., Foddy, M., & Platow, M. (Eds.) (2002). *Self and identity: Personal, social, and symbolic*. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293-307.
- 大石千歳 (2003). 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房
- 大和田智文 (2006). 若者観察者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 専修総合科学研究, **14**, 201-228.
- 大和田智文 (2007). 若者の社会的アイデンティティにみる若

者行動理解の諸相に関する検討 文研論集, **49**, 11-33.

大和田智文 (2010). 若者再考—自己カテゴリ化理論からの接近 専修大学出版局

大和田智文・下斗米淳 (2008). 若者らしさの表出としての一人称への意味づけ—集団に応じた意味づけの違い— 対人社会心理学研究, **8**, 89-95.

Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Basil Blackwell.

注

- 1) この予備調査は、学生生活を送る中で必要不可欠と想定されるような集団を自由記述にて尋ねるものであった。
- 2) 一人称への意味づけ尺度を実施するときは、方法の中で示した「質問1-1」と「質問1-2」の両方を提示する必要がある。

付記

本研究は、既刊の論文(大和田・下斗米, 2008)と、これをひとつの章として編集された、博士論文に基づく書籍(大和田, 2010)において用いたデータを再利用の上、新たに分析を直したものである。